



日本モビリティ・マネジメント会議
ニュースレター

Vol.30 ● 2013.12.31

【発行】 JCOMM実行委員会
ニュースレター編集部
【お問合せ】 筑波大学 谷口綾研
大阪大学 松村研
mail: info@jcomm.or.jp

MMIに関連する会告掲載希望やご意見等、
随時受け付けております。

平成二十五年も残りわずかとなりました。今年も、全国で様々なMMが実施されました。来年以降もさらなる進展を期待したいところです。
今号は、第九回JCOMMの開催速報を中心にお届けします。

イベント案内 第九回JCOMM帯広の案内

第九回JCOMMは二〇一四年七月二十五日（金）、二十六日（土）の日程で、北海道帯広市「とちかちプラザ」他にて開催されます。

帯広市は、二〇一一年度に公共交通を活性化させる計画を策定以来十年以上に渡り、継続的に、バス事業者、民間事業者、行政が連携して、路線バスの利用促進活動を行っております。その甲斐あって、最近ではバス利用者が減少から微増傾向に転換する所までできました。このような地域ぐるみの活動によって、バス利用者の減少を食い止めることができることを実証



写真 扇が原展望台から望む十勝平野

した点が評価され、国際交通安全学会賞（業績部門）を受賞しています。
帯広大会の発表申し込み要領・締め切り等の詳細については、一月下旬を目処にJCOMMメールマガジンリスト、WEBサイト等にてお知らせいたします。
広大な十勝平野の風景と美味しい北海道のフードで皆様をお迎えたいと考えておりますので、多数の皆さまのご参加をお待ちしています。

イベント案内 平成二十六年JCOMM賞 候補募集について

他地域の模範となるような、効果的なMMプロジェクトを表彰するJCOMM賞の公募を、平成二十六年度も行います。昨年度同様、マネジメント賞、デザイン賞、技術賞、プロジェクト賞と合わせて四つの部門で公募・審査を行います。

応募要領や期日等は、一月下旬までにJCOMMメールマガジンリストならびにWEBサイトでお知らせします。自薦・他薦を問いませんので、奮ってご応募ください。

【JCOMM賞の主旨】

国内の様々なモビリティ・マネジメントについての様々な取り組みや研究の中でも、特に優秀な取り組みや研究をJCOMM実行委員会として選定し、その実現に貢献した個人あるいは団体を表彰する。これを通じて、モビリティ・マネジメントの「実務発展」と「技術発展」を期待します。



写真 幸福駅に佇む列車

【各賞の概要】

○マネジメント賞
モビリティ・マネジメントにおける実務的な「一連の持続的マネジメント」の中でも、とりわけ、都市・地域のモビリティの質的改善や渋滞、環境問題、公衆の健康増進問題や都市構造問題などの交通に関連する諸問題の解消に向けて、効果的に推進されている一連の持続的マネジメントについて授与

○技術賞
モビリティ・マネジメント実務に資する技術の発展に、顕著な貢献をなした「研究業績」について授与

○プロジェクト賞

モビリティ・マネジメントの一連の取り組みの中で実施された「実務的なプロジェクト」の中でも、とりわけ、都市・地域のモビリティの質的改善や渋滞、環境問題、公衆の健康増進問題や都市交通問題などの交通に関連する諸問題の緩和に実際に大きく貢献し、諸問題の抜本的緩和に繋がっている新規性を持ち、かつ、その完成度・応用可能性や取り組み姿勢がすぐれたプロジェクトについて授与

○デザイン賞

モビリティ・マネジメントにおける実務的なプロジェクトにおいて実際に使用されたマップ、リーフレットフォルダー、アンケート表等の各種ツールの中でも、とりわけ秀逸なデザインがなされた一つ、ないしは、一群のツールについて授与



写真 十勝牧場の白樺並木

JCOMM 法人会員紹介 Vol.13 ㈱オリエンタルコンサルタンツ

(株)オリエンタルコンサルタンツは国内外の公共プロジェクトを中心に様々な事業に携わっています。MMには平成十八年頃から取り組んでおり、これまでJCOMM賞を受賞した松江市、倉敷市水島コンビナート、池田市のプロジェクトをはじめとして、各地のプロジェクトに関わらせて頂きました。当社は、MMを人を中心とした運動として、丁寧なコミュニケーションや関係づくりを基本に、それら

をコツコツと積み重ね、育ていくことに留意して進めてきました。またその地域で車を控えたり、公共交通を知り活用することの意義を考え、より幅広く効果的に連携させていくことも意識しています。例えば、池田市では地域通貨と組み合わせる効果的な地域活性化に結びつけたり、京都府の学校MMでは協同する交通事業者や学校の視点での効果にも着目したプログラムづくりや分析、しくみづくりを行ってきました。

▲ 池田市で地域通貨とMMの情報提供を連携させた例



ます。地域にとって交通が持つ意味を考える機会となり、地域に関わっていくモチベーションを新たにすることもできます。MMを通じて得られた経験を活かし、今後の日本の交通まちづくりに貢献していきたいと考えています。

秦野市では、平成十六年度末、国土交通省の補助金をいただいで、秦野市TDM(交通需要マネジメント)実施計画を策定しました。この計画に基づいて平成十七年度から五カ年間、十一の施策を掲げTDMを推進しており、その一つにTDM教育が位置づけられています。私は平成十七年四月に都市経済部都市計画課の公共輸送担当主幹に異動し、この部署で九年目になります。TDM教育は社会人向けと小学生向けの二つがありましたが、本稿では小学生向けのものについて、現在まで継続している理由として考えられることをお話したいと思います。

私とMM

第6回：秦野市都市部公共交通推進課 課長 保坂富士雄

ませんでした。私自身、中学と高校の社会科の教員免許を持っていることもあり、このプロジェクトはとても楽しみで、教壇に立つてやってみたくも思っていました。学校教育との協働に対するハードルが、公共交通関連部署の側でも低かったのかもしれない。

最も苦労した点は、どうしても広めていけるか、継続できるシステムを作ることができるかという点でした。現場の先生方は日々忙しく過ごされており、新しいプログラムに負担感や抵抗感があることはまちがいはありません。一年目は年度途中に新しい授業の話を持って行ったところ、各小学校ともすでに年間計画ができていたため対応が難しかったので、次の年からは三月の校長会で次年度の依頼をすることにしました。この段取りも高木先生にご尽力いただきました。

毎年二、三校ずつTDM教育を実施し、平成二十二年度から二巡目に入りました。そのときには各小学校の協力体制が整ってきて、来年はうちの小学校だなどわかってきて、スケジュールに組み込んでくれるようになりました。当初は講師を大学教員に依頼し、行政側主体で実施していましたが、学校の先生主体でアレンジして行っていたため、平成二十二年度より夏休みに現場教員対象の研修会を開催することにしました。この研修会を設けられたことも大きな成果だと思っています。

平成二十五年度で二巡目が終わりますが、本町小学校では主体的に、独自のTDM授業に取り組みこととなりました。また、鶴巻小学校では平成二十三年度に輪番で授業を行い、今年度もやってみようとする流れも出てきています。このような流れをつくるのができたことは大きな成果です。今後、さらに主体的に取り組んでもらえる学校を増やしていきたい、市内十三校すべてが自主的な実践を行ってくださるようになってほしいです。

個人的な話ですが、実は私も市役所までクルマ通勤を始めて二年くらいたったときに、電車通勤に変えました。車で十五分ですが、電車だと駅まで徒歩十分、電車で五分、市役所まで徒歩十分くらいで、だいたい三十分くらいかかります。TDM教育を推進し、皆さんクルマを控えましょう、とお願ひしている本人が車通勤であることに矛盾を感じたことが手段変更の大きな理由です。変えた当初は苦でしたが、それが普通になった今はぜんぜん苦ではありません。自分の意識が変わってきたことを感じます。健康のことも考えて、時間があれば夜に妻と歩いたりもするようになりました。

TDM教育に限らず、MM施策を成功させるコツは、とにかく自ら実践してやってみることだと思います。そうするとMMの必要性やよさが通勤者としてわかってくると思います。これを施策として行う担当者がマイカー通勤していたらダメでしょう。そうでないと人には伝わらないと思います。

当初、最も苦労したのは教育委員会に協力を依頼することでした。言うまでもなく、小学生向けのプログラムの作るには教育委員会との協力関係構築が不可欠です。秦野市ではまず、小学校の校長会でTDM教育への協力を依頼しました。校長会では「？」という反応ではありましたが、当時の教育委員会指導室の指導主事であった高木先生(現・大根中学校長)が後押ししてくださったのでその後のやりとりはスムーズに進みました。高木先生は社会科の先生で、最初から「かしこいクルマの使い方」を考えるこの授業に興味を持ってくださっていたようです。そして教育委員会の中で後継者を育て、現在まで引き継がれています。高木先生がいなかったら現在のようシステムはできてい